

Vol.14 / No.3



## 存在感のアピール

事務局長 小林二三男

1988年3月、日本で初めてのエアードーム「東京ドーム」が完成しました。完成と同時に野球体育博物館は、それまでの2倍の広さの1,700㎡になってドーム内に移転しました。展示スペースは大幅に広がり、プロ野球からアマチュア野球まで幅広く紹介できるようになりました。図書室は明るくゆったりと閲覧しやすくなり、落ち着いた調べものができるようになりました。野球殿堂は専用の展示室を確保でき、内装や照明には特に気を配って先人への感謝を込めた造りになって、格調のある落ち着いた雰囲気の中でゆっくりレリーフを鑑賞できるようになりました。資料の収蔵スペースは皆無だったものが、新たに135㎡ほどの広さが確保され、資料収集と整理に大きく前進しました。今では展示されている10倍以上の資料が保管され、常設展示の入れ替えや企画展・特別展に活かされています。これからも我が国唯一の野球体育博物館としてより充実した内容を目指し、野球界の発展に寄与すべく努力してゆく所存であります。

しかしながら、東京ドームには年間800万人を超える人々が訪れ、ドームシティー全体では3,600万人という非常に多くの来場者で賑わっている中、外観が地味な博物館はその賑わいの中では存在感が薄れがちでありました。「入口が分かりにくい」「どこに在るのですか」等、現在でも問い合わせが続いており、視覚的な存在感不足は否めない状況になっています。

'96年10月には正面入口の壁面全体にレリーフを施したり、大きめの看板を出したりとそれなりにアピールはしてきたのですが、ドームの喧噪の中ほとんど埋没してしまっていました。

この度、入口前の柱巻きに「力強さと情熱」を表現した造作を施し、この賑やかなドーム周辺で「野球体育博物館」の存在を大きくアピールし、展示や施設に対する期待感を醸成してゆこうと思います。

また、今までは入口から展示施設まで一階層階段で下りなければならず、お客様に大変ご不便をお掛けしてまいりましたが、念願かなってエレベーターの設置が認められました。入口を入ってすぐのところを設置しますので、非常に使い勝手の良いものと思っています。11月から工事入り、来年2月中旬には完成の予定です。



完成予定図 (入口前)



## アンケート調査報告

本年8月に、平成14年夏以来2年ぶりとなるアンケート調査を行った。

調査日には、①8月6日(金)東京ドームで巨人・阪神戦ナイター開催 ②8月15日(日)巨人・横浜戦ナイター、館内で「親子クラブ製作教室」イベント開催 ③8月30日(日)都市対抗野球開催というようにそれぞれ異なる条件の日(入館者総数は6日12,022人、15日17,170人、30日6,464人だった)を選んだ。また、アンケートにご協力いただいた方の中から、抽選で5名にプロ野球選手モデルクラブ(昨夏のクラブ製作実演イベントでミズノ増田クラフトマンが当館内で製作したもの)のプレゼントを行った。

設問は以下のとおり

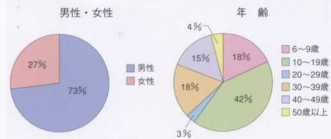
- あなたの性別と年齢をおしえてください。  
 男性  女性  
 6~9歳  10~19歳  20~29歳  
 30~39歳  40~49歳  50歳以上
- どなたと何人でいらっしゃいましたか?  
 家族  友人  カップル  
 その他 \_\_\_\_\_人
- この博物館をどのように知りましたか?  
 新聞・雑誌  テレビ・ラジオ  インターネット  
 東京ドームシティーにきて初めて知った  
 その他 \_\_\_\_\_
- この博物館のホームページをご覧になったことがありますか?  
 はい  いいえ
- この博物館に来たのは何回目ですか?  
 初めて  2~4回  5回以上
- この博物館で印象に残ったコーナーはどこですか?(複数回答可)  
 プロ野球  野球の歴史  
 アマチュア野球  映像アター  
 野球殿堂  オリピック展  
 バッターボックス体験  図書室(体験学習コーナー)  
 その他 \_\_\_\_\_
- ご意見、ご要望がありましたらご記入下さい。

設問すべてに答えている人だけを調査対象とし、8月6日246人(男性179、女性67)、15日374人(男性282、女性92)、30日154人(男性106、女性48) 合計774人(男性567、女性207)について集計を行った。

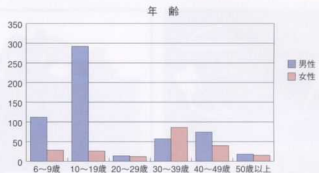
(集計結果)

## 1. 性別・年齢 [女性は27%]

女性は全体の27%で、前回(平成14年)の37.5%から10.5%減少し、それ以前の水準(平成10年27%、12年29%)に戻った。前回はキャラクターの愛称募集を兼ねてアンケートを行ったので、成人男性は参加しにくく(30、40代男性が前回は全体の9%、今回は17%)、特別な結果になったのではないだろうか。

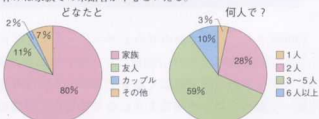


6~19歳の男性(子供世代)と30~40代の男性・女性(親世代)が多い。



## 2. どなたと・何人で [80%が家族で来館]

家族で来館が80%(平成12年77%14年81%)、特に女性だけを集計すると91%が家族と来館している。アンケートに答えている人々が、そのまま来館者全体を代表しているとはいえないが、やはり夏休みは家族での来館者を中心といえる。



## 3. どのように知ったか?

[45%が新聞・雑誌、テレビ・ラジオ、インターネットで当館を知った] この設問を前回は行わなかったが、「東京ドームに来て知った」

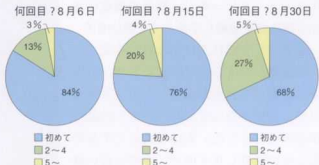
が平成10年には82%、平成12年は51%だったものが今回は41%に減少し、メディア(「新聞・雑誌、テレビ・ラジオ」「インターネット)を通じて知った人が合計45%となり、初めて順位が逆転した。企画展などのプレスリリースをマスコミに送付したり、ホームページの新着情報をこまめに更新するなど、積極的な広報活動の成果といえるだろう。「その他」には「子どもの頃、連れてきてもらった」「以前から知っていた」などと書いていた人が多かった。

## 4. ホームページ [4人に1人がホームページを見ている]

全体の24%の人が野球体育博物館のホームページを見ていた。

## 5. 何回目か? [4人に1人がリピーター]

2回目以上が全体で23%と前回までのアンケートに比べ多少減少している。(平成12年26% 14年27%) しかし、6日は16% 15日は24% 30日は32%と各日それぞれ大きく違っていた。



## 6. 印象に残ったコーナー

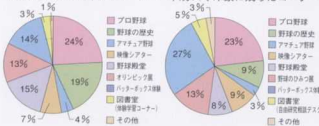
[「野球の歴史と野球殿堂を支持する人が増えた」]

前回の調査と比較して、野球の歴史と野球殿堂を支持する人が増え、反対にバッターボックス体験は減少した。

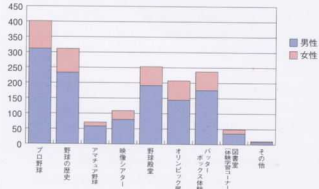


全体では1プロ野球、2野球の歴史、3野球殿堂、4バッターボックス体験、5オリンピック展…の順だが、リピーターが多かった8月30日だけを見ると1プロ野球、2バッターボックス体験、3野球の歴史、4オリンピック展、5野球殿堂…となっている。

平成16年印象に残ったコーナー



コーナー



7. ご意見・ご要望【32%の人が意見・要望を書いてくれた】

全体の32% (男性28%女性43%)の人が意見や要望を書いた。これは全く予想外の多さだった。内容は、建設的な意見・要望、提言など(体験コーナーを増やして欲しい、バッターボックス体験がもっと当たるように、殿堂入りの選手についてもっと深く知りた

い…)と感想(楽しかった、子供が喜んだ、知らなかったことがわかった…)に二分されている。特に8月6日の女性は48%が意見・要望を書いている。

〈まとめ〉

新たな来館者とその傾向

今回調査した3日間のうち、8月6日と8月30日の調査結果にはそれぞれ特徴があった。8月30日はリピーターが多く、前回までの調査と同様に、バッターボックス体験やオリンピック展など、いつ来ても「面白い・楽しい」ものや期間限定の企画展に興味を示した人が多かった。一方、8月6日はリピーターが少なく新たな来館者が中心だと考えられる。野球の歴史に興味を持ち、女性の48%、男性の33%が意見・要望を書き、その内容も「今まで知らなかったことがわかった」「もっと詳しく知りたい」などが目立った。知識欲や探究心を持ち、より積極的に博物館を利用しようとしている傾向が、今までにははっきり現れている。これは、前回のアンケート調査報告(ベースボールニュースVol.12 No.3)で、当館のコンセプトである「面白くてちょっとならぬ博物館」のうち「ためになる」部分への期待が予想だらうと関口学芸員が予測したとおりの結果だといえる。積極的に博物館を利用しようとする新たな来館者の傾向は6日に特に顕著に現れたが、3日間を通じて32%の人が意見・要望を書いていることから、確実に広がっていることがわかる。

「面白くてちょっとならぬ」博物館として、子供たちを中心に野球ファンの底辺拡大に貢献するのが野球体育博物館の大きな使命だが、さらに野球についての知識欲や探究心に答えるのも重要だと考える。この新たな来館者のニーズに対応するため、展示だけではなく、さまざまな講演会、講習会、ギャラリートーク、展示解説ツアーなど、また、図書室のラーニングセンターやアークライブとしての機能など、いろいろな可能性を考えて「もっとためになる」役に立つ博物館の部分も育てていくのが今後の課題だと考えられる。

学芸員 新美和子

こんぢちは図書室です

「体験学習コーナー ～用具のひみつ～」と「夏休み自由研究相談デスク」

今年も7月17日(土)～9月5日(日)まで、図書室およびイベントホールにて小・中学生を対象に「体験学習コーナー」と「夏休み自由研究相談デスク」を開設しました。イベントホールでは用具のひみつをパネルで紹介。図書室では昨年の実物の用具に、ボイズリーグやリトルリーグなど子どもたちの野球用具を加え、より一層野球を身近に感じてもらえるようなものとなりました。

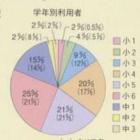
【体験の内容】

- ・軟式ボールを150cmの高さから落とす、反発の違いを比べてみる
- ・ボイズリーグやリトルリーグの金属バットとプロ野球の木製バットを持って比べてみる など

「体験学習コーナー」の利用者は22,383人で入館者49,749人の約45%にあたるかたが訪れました。また、「夏休み自由研究相談デスク」の利用者は180人で、昨年比小学校4年生が3%、6年生が4%、中学1年生が1%の増加となりました。テーマでは元来の「野球の歴史」に加え、「オリンピック展」や「アマチュア野球」について調べる子供たちが増えるなどテーマが多岐にわたりました(グラフ、表参照)。

また、利用した保護者の方から「どんなことを調べてどうまとめたらいいか」、「このテーマからどう発展させたいのか」などの相談が増加し、本やテーマを紹介するだけではなく自由研究のまとめ方のヒントを求められました。来年は、「体験学習コーナー」や「夏休み自由研究相談デスク」に対する期待の変化を反映させ、より充実したものを行ってきたいと思います。

司書 小川 晶子



学年主な自由研究のテーマ

学年	プロ野球	野球用具	野球展	オリンピック	野球	その他
小1	0	0	2	0	0	1
小2	0	0	5	0	0	2
小3	3	3	4	3	1	0
小4	3	6	18	2	0	7
小5	6	7	13	0	5	2
小6	11	3	19	3	0	1
中1	4	4	6	3	0	3
中2	0	0	1	0	0	2
中3	1	1	0	0	0	1
合計	28	24	68	11	6	38

04年利用館生全員からみた割合: 16% 13% 38% 6% 3% 4% 21%  
03年利用者全員からみた割合: 20% 14% 47% 8% — 21%

\*複数のことを調べることもあり、合計は100%を超える。

※前号の「メジャーリーグ30球場」の表記が違っていたものがあります。お詫びして訂正いたします。

- ①順: Citizens BallPark→正: Citizens Ball Park
- ②順: Petco Park→正: PETCO Park



## コラム/博覧・博楽 (12)



## Cooperstown: A little hard to get to, but well worth the effort (Part II)

By Marty Kuehnert,

(Visiting Professor of Sports Sciences, Waseda University)  
(Supporter of Baseball Hall of Fame and Museum)

The rustic little town of only about 2,000 residents is hidden away in a picture-postcard setting. Scenic hills. Lush foliage. Quaint streets and small stores. A beautiful lake.

The town is out of the way, but yet more than 350,000 visitors make the pilgrimage every year.

Why was the Hall of Fame and Museum opened in Cooperstown on June 12, 1939? Well, it was thought at the time that the game of baseball had been invented by Abner Doubleday in Cooperstown in 1839. Subsequently, other people and towns have taken credit for the birth of baseball, most recently the city of Pittsfield, Massachusetts, claiming that baseball was played in their town in 1791 and maybe earlier.

Regardless of the actual birthplace of the game, however, Cooperstown is now where the world's greatest collection of baseball memorabilia and memories are stored. The beautiful old museum contains more than 35,000 artifacts, 130,000 baseball cards, 2.6 million library items, 500,000 photographs, and 10,000 hours of film and video footage.

I didn't have enough hours to explore Cooperstown, because one day is almost not enough.

One thrill was to see a pair of "Shoeless" Joe Jackson's shoes and learn how the legendary player got the nickname Shoeless Joe. In 1908 Jackson played in a minor league game in just his stocking feet, because the previous day he had worn a new pair of spikes which had given him blisters. A sportswriter the following day wrote about "Shoeless Joe," and the moniker stuck and followed him through his 13 major league seasons and a career cut short by his supposed involvement in the 1919 "Black Sox" scandal.

Whenever I talk about Ichiro Suzuki, I like to compare him with Shoeless Joe. Jackson broke in with a major league bang in 1911 when he was just 22, hitting .408 for the Cleveland Indians. His MLB career average was .356, and he was one of the best defensive outfielders ever.

Besides seeing Jackson's shoes in Cooperstown I got to see Ichiro's bat from the 2001 season when he became only the second rookie in history to be voted Rookie-of-the-Year and the league MVP. And then there was the line-up card from the Angels-Mariners game on April 13, 2001 which showed that for the first time in history a Japanese pitcher, Shigetoshi Hasegawa, and hitter, Ichiro, had faced each other.

Hideki Matsui has two bats on display as well. His used on April 8, 2003 to hit a grand slam homer on his debut in Yankee Stadium, a first in Yankee history, and his lumber used to clout a home run in Game 2 of the 2003 World Series, another first for a Japanese player.

And the list goes on. Too long to mention here.

What perhaps impressed me most at Cooperstown more than the memorabilia was how many different people were there, clearly having traveled to this inconvenient location from thousands of miles away. And it became clear that baseball is truly America's national pastime. A game which nearly everyone has played. A game which links generations together with a common bond - their love of a game designed to be played in the spring and summer, on green grass with a leather ball and wooden bat.

If you have the time and inclination, I strongly suggest you visit Cooperstown. You won't be disappointed. And, oh yes, don't forget the Japanese Hall of Fame and Museum, as well. It's located in the Tokyo Dome, and while the history is not as long, it is still colorful and fascinating, and the location a lot more convenient than Cooperstown, NY.

- End - (for Japan HOF, June 30, 2004)



(日本語訳)

## クーパースタウン — 時間をかけても行く価値のある野球のメッカ (後編)

マーティン・キーナート

(早稲田大学スポーツ科学部客員教授、野球体育博物館維持会員)

人口僅か2000人の小さな田舎町は絵葉書にあるような風景の中に包まれている。丘は美しく、木々の葉は青々と茂り、かわいい店が建ち並んだ通りは趣きがあり、湖が美しい。この人里離れた町に毎年35万を超える人々が詣でるのである。

なぜこのクーパースタウンに1939年6月12日野球殿堂が開館したかと言えば、当時は、1839年にアブナー・ダブルデイがこの地で野球を発明したと信じられていたからである。しかし、その後、野球の発祥の地として、ほかの町や人も名乗りをあげるようになった。ごく最近ではマサチューセッツ州のピッツフィールド市が1791年またはそれ以前にそこで野球が行われたと主張している。

しかし野球が実際にどこで生まれたかには関係なく、今やクーパースタウンには野球に関する世界最大の貴重な記念品のコレクションがある。歴史ある美しい博物館には3万5千点以上の資料、13万枚の野球カード、260万点の出版物、写真50万枚、1万時間分にも及ぶフィルムとビデオなどが収蔵されている。

たった1日ではクーパースタウンを堪能するには到底時間が足りなかったが、とりわけ興奮を覚えたものがある。

それは「シュールズ」ジョー・ジャクソンの靴を眼にし、この伝説的選手のあだ名「シュールズ(靴無し)ジョー」の由来を知ったことだった。1908年のある日、マイナー・リーグの試合でジャクソンはスラッキング姿でプレーした。前日に新調したスパイク靴で水ぶくれができていたのだ。次の日記者が「シュールズ」ジョーと書き立てた。かくして彼は、13年間の大リーグ生活中(1919年の「ブラックソックス」事件に関与したことが疑われて頓挫した)ずっとこの愛称で呼ばれることになった。

私は、イチローのことを話すたびに、「シュールズ」ジョーと比較したくなる。弱冠22歳で大リーグ入りしたシュールズ・ジョーは、クリーブランド・インディアンスで4割8厘の打撃成績をあげ、大リーグを興奮させた。彼の大リーグ通算打率は3割5分6厘で、大リーグ屈指の名外手だった。

シュールズ・ジョーのスパイク靴のほかにも、イチローが新人王と最高殊勲選手に同時になるという史上二番目の快挙を成し遂げた年のバットを見ることができた。また、2001年4月13日のアナハイム・エンゼルス対シアトル・マリナーズ戦の両チームのラインアップカード(監督が書く先発メンバー表)も見た。そこでは史上初めて日本人投手長谷川滋利と日本人打者イチローが対決していた。

松井秀喜もバットが2本陳列されていた。1本は2003年4月8日ヤンキース・スタジアムのデビュー戦で満塁ホームラン(ヤンキース史上初)を打ったときのもの。もう1本は2003年のワールド・シリーズ第2戦でホームラン(これも日本人初)を打ったときのものであった。数え上げれば長くなって、とてもここでは書ききれない。

しかしながら、たぶん私にとって、陳列されている数々の貴重な資料以上に最も印象深かったのは、様々な人々がそこを訪ねていることであつた。彼らが何千マイルも離れた所からこの不便な場所を遠く訪れたことは明らかだった。野球が本当にアメリカの国民的娯楽であることがよくわかった。殆どすべての人がプレーしてきたのだ。何世代もの人々を共通の絆で結びつけるゲーム。春と夏に革のボールと木のバットで、青い芝生の上で楽しむゲームを愛する気持ちが彼らを引きつけているのだ。

読者に時間とその気持ちがあれば、クーパースタウンを訪れることを強くお勧めしたい。訪れて失望することはないだろう。もちろん日本の野球殿堂もお忘れなく。こちらは東京ドーム内にある。クーパースタウンほど歴史は古くないが、こどももまた楽しく、魅力的なところで、場所はニューヨーク州のクーパースタウンよりもずっと便利である。

(日本語訳 鈴木龍一 当館顧問)



## 殿堂入りの人々を語る(7)

## ～父の野球人生～

久慈 次郎 (久慈次郎氏長男)

1959年殿堂入り  
久慈 次郎氏レリーフ

父久慈次郎が亡くなって65年の夏が過ぎました。私は父がデッドボールで亡くなった2ヶ月と17日後に生まれました。

父の事は、母や姉達・知人の方々から聞いたことでしか記憶にありません。父は家庭では試合に負けても家に持ち込まない人でした。動物好きで犬や猫を拾って来ては可愛がったり、野球と同じくらいスキーが好きだったようです。絵は幼少の頃より好きで上手だったようで、久慈運動具店のパンフレットの絵はすべて父が書いていたようです。

私もやはり父の血を受け継いだのか、スキーや運動は大好きで、家族とはよくスキーに行き、また仕事としては美術大学を卒業後、現在高松建設株式会社の設計部で建築設計の9年の経験を経て、建築建物の完成予想図を若い設計者のために日々描いております。

父は現代のようにプロ野球のなかった時代、早稲田大学の先輩の進めで函館大洋倶楽部に入部し、函館水電（北海道電力）に就職、後援者の進めで母と結婚、その後勤務と野球遠征等の過密な日々から母が身体と経済的な事を心配し、運動具店を昭和2年に始めました。いろいろな資料を調べる度に、父はなんと不運な運命だったのかと惜しい思いで一杯になります。函館の大火がなければ、多分巨人軍の前進、大日本東京野球倶楽部の主将としてプレー出来たでしょうし、あんなに早死しなくて済んだのだらうと思います。

当時都市対抗野球は盛んで、父の人気は大変なものだったようで、第1回日米野球選抜ファン投票で、最高票で主将に選ばれ、第2回も主将として沢村とバッテリーを組み、球史に残るすばらしい試合をし、日米野球が終わった後発足した大日本東京野球倶楽部の主将に選抜されたのですが、この年の3月21日に起きた大火で運動具店は全焼し、函館大洋のナインもほとんど家を失い、野球用具も全て失ってしまいました。

店の再建やナインの人達の事も考え、父は第1回アメリカ遠征に向かう間際に、三宅監督にあてて手紙を送っていたのです。この手紙が運命を変えてしまったのです。

「拝啓、のよれば皆々様ご健勝の段取り奉り候、私儀、今回の大日本野球クラブ設立に際し、非才の身を持ち主将の重職に任命され感激おおくにあたわず、粉骨砕身、もって発足する新球団のため働く所存により候ところ、家業手離し難き事生じ、真に申し訳なきことと存じ候えども、球団より身を引くの止む無きに立ち至り候。これまでのご厚情の数々を思えば、身を切らるる思いと存じ候えども万やむなく、御叱責寛宥の上にてこの状したためおる次第に御座候……」

(原文のまま)

その時代の給料表の資料によりますと父は別格に五百円、六大学出身者で一番高い人が百八十円、沢村やスタルヒンが百二十円だったそうです。これほど望まれていたのに初代主将の名のみ残して身を切られる思いで断念せざるを得なかったのです。

その後店を再建し、函館大洋倶楽部の監督兼選手として頑張っていました。

昭和14年8月19日札幌で全北海道、樺太実業団野球大会の試合中、四球で出塁しかけた父は、捕手に二塁けん制球をわずか一間の距離において右こめかみにぶつけられ、昏倒し、ついに8月21日帰らぬ人となりました。

父の死後生まれた私に、母は同じ名前をつけました。父の死後、函館と札幌にあった店を閉鎖、幼い3人の子どもたちを抱え、戦争がなければそのまま蓄えから恵まれた生活ができたかもしれませんが、母は大変苦勞して私達を育ててくれました。

今年はずいぶんいろいろなことがあって大変でした。父は家業でお金を工面し、ナインの人達も店で雇い、毎年都市対抗野球に出場していました。今では久慈賞の事も知って下さる方も少なくなりました。でも好きな野球を一生やれて幸せだったのだらうと、毎日仏前に線香をともし、母の労と重ね拝んでおります。



## 知ってほしいこんな資料(49)

### 長嶋監督直筆“3”の日の丸



当館では現在、アテネオリンピック野球日本代表の全試合をベンチから見守った日の丸を展示中です。

この旗は、日本代表の出発前日の8月4日、長嶋一茂氏よりチームに託されました。日の丸の左上にはチームスローガン“FOR THE FLAG”と愛称“長嶋JAPAN”がプリントされ、その下には長嶋茂雄監督直筆の“3”が入れられています。

アテネでの全9試合を見守ったのち、27日にチームとともに帰国、夏休み最後の日となった8月31日からエントランスホールに展示中で、混雑時には写真を撮るお客様であふれています。

その他にも、試合前に選手がタッチし、同じくベンチに掲げられた監督ユニホーム（ホーム用）や、24名の代表選手サインボールもあわせて展示しています。

学芸員 関口 貴広

## 博物館からのお知らせ

### 【理事・評議員の交代】

- <新任> 理事：滝鼻卓雄氏（㈱読売巨人軍取締役オーナー）  
評議員：牧田俊彦氏（㈱阪神タイガース専務取締役）  
清武英利氏（㈱読売巨人軍取締役球団代表）
- <退任> 渡邊恒雄氏、竹田邦夫氏、三山秀昭氏

### 【維持会員を募集しています】

財団法人野球体育博物館は、昭和34年に野球専門の博物館として開館して以来、野球や体育に関する資料を収集・保管・公開してきました。バット等の実物・写真資料は約3万点、図書・雑誌は約5万点を収蔵しており、展示や閲覧という形で多くの方々に利用していただいております。

また、年1回競技者表彰委員会と特別表彰委員会にて野球界の功労者を選出し、「野球殿堂入り」として表彰しています。

維持会員とは、このような博物館の事業にご賛同いただいた方々に、維持会費をお願いし、博物館の運営をご支援いただくものです。

- ・会員の特典
  - ・当博物館発行「ニュースレター」(季刊) 送付します。
  - ・何度でも無料で博物館に入館できる優待証を発行します。
  - ・会員以外の方でも利用できる博物館招待券を差し上げます。
  - ・イベント情報などを優先的にご案内します。

・会員の種類と会費  
年会費（4月～翌年3月迄）

法人 1口 10万円 個人 1口 1万円

※入会日より、初年度年会費の割引があります。

・お問合せ 財団法人野球体育博物館 業務部 まで

### 【2005年度野球殿堂入り発表】

2005年11月11日(火)に野球殿堂入りの記者発表を館内野球殿堂ホールにて15:00から行ないますので、ぜひご来館下さい。

### 「かっとばし」を博物館で販売します

折れたバットのリサイクル商品「かっとばし」を、11月2日(火)から当館で販売する予定です。

この箸は野球殿堂（Hall of Fame）のロゴが入った博物館オリジナル商品です。

価格は1膳大（男性用：写真参照）・中（女性用）が1,890円、小（子供用）が1,575円です。（価格は税込み。また12球団ロゴマーク入りの箸も販売します。）



### 松中信彦選手

#### 三冠王達成記念展示

日本プロ野球18年ぶりの三冠王を達成した松中信彦選手（福岡ダイエーホークス）のコーナーを新設しました。ご本人と球団のご協力により松中選手使用のバット、ユニホーム、スパイクなどを展示しています。

期間 ～平成17年夏（予定）



### ● 博物館のご案内

場所	東京ドーム21ゲート右
開館時間	3月1日～9月30日 AM10時～PM6時 10月1日～2月末日 AM10時～PM5時 *入館は閉館の30分前まで
入館料	大人 400円 (300円) 小・中学生 200円 (150円) ( ) は20名以上の団体
休館日	年曜日（祝日、プロ野球開演日、春・夏休み中の月曜日は開館） 年末年始（12月29日～1月1日）
（11月・12月・1月の休館日）	
11月	1日・8日・15日・22日・29日
12月	6日・13日・20日・27日・29日・30日・31日
1月	1日・17日・24日・31日

#### ● 編集後記

館内では11月から2月中旬までエレベーターの設置などの工事を行います。今まで「階段を降りるのはちょっと…」という方たちにもお気軽にご入館いただけると思いますので、ぜひいらして下さい。

### Newsletter Vol.14 / No.3

2004年10月25日発行  
編集・発行 財団法人 野球体育博物館  
〒112-0004

東京都文京区後楽 1-3-61  
Tel 03 (3811) 3600 Fax 03 (3811) 5369  
http://www.baseball-museum.or.jp/  
定 価 100円



## リレ－随筆(18)

競技者表彰委員会幹事

富重 圭以子 (毎日新聞社)

イチロー、古田敦也、落合博満。2004年の野球人といえば、この3人に尽きるだろう。マリナーズのイチローは、ジョージ・シスラーの作ったメジャー・リーグのシーズン最多安打記録257本を84年ぶりに塗り替えた。日本プロ野球選手会の古田会長は球界再編問題で選手とファンの意見を反映させるべく八面六臂の活躍をした。そして「補強はいらぬ。現有戦力の成長だけで優勝できる」と宣言して就任1年目で達成した中日の落合監督である。

野球記者は、3人のおかげで随分忙しい思いもしたが、大いに勉強になった。なにしろどれ一つとっても歴史的なできごと。野球史の重要なページをじかに目撃している、という緊張感は、なかなか味わえるものではない。

3人には共通点がある。プロ入りした時点では、けっして最高の評価を得ていないことだ。イチローは愛工大名電高からオリックスに入団したときはドラフト4位だった。愛知県生まれのイチローは中日ファンだったが、中日は細身の投手には見向きもしなかったといわれる。シーズン200安打で日本中の野球ファンを驚かせ、さらにはメジャーの歴史を変えざる打者になるとは、とても予想できなかった。

古田は立命館大4年のとき、ドラフト指名を待ったが、ついに指名の声はかからなかった。眼鏡をかけた捕手はプロでは使えない、というのが理由だった。トヨタ自動車時代、全日本のマスクを任されてソウル五輪で銀メダルを獲得した実績をもってしても、ヤクルトの2位指名だった。

落合も東洋大時代は無名が存在だったし、東芝府中時代も評価は高くなかった。二塁手なのに足が遅く、守備も下手だったので、プロでは疑問とされた。右への打球が伸びる点に注目したロッテが3位で指名したのがやっとなら。3度の三冠王に輝いたうえに、監督としても類まれな能力を発揮して優勝に導く将来を、プロ入りの時点で予想した人はいなかったはずだ。

今年の野球を支えた3人を並べてみると、人によって受け取り方が違うのではないかと、思う。「人の評価は難しい」と見る人もいるだろうし、「3人とも低い評価に発奮したのだ」ともいえるし、「彼らは努力を人一倍したので、努力こそが最も重要なのだ」と考える人もいるだろう。きっとどれも一面は正しい。私はもうひとつ付け加えたい。「ものごとを相対的にとらえる力、論理的な思考力が彼らにはあった」ということだ。

評価が低かったスタート地点で、3人に共通していたのは、自信を失わなかったことだ。細すぎる、とか、眼鏡をかけている、とか、足が遅い、といった弱点を補って余りある自らの能力を疑わなかったのだと思う。それも間雲な自信ではない。論理的に考えれば当然評価は逆転するはずだ、と考えていたと思う。

野球選手はこういうタイプでなければだめ、とか、野球界は経営者が仕切るものだ、とか、チームはこう作るべきだ、といった固定観念を最初から持たず、頑固に自分を貫いた3人が輝いた2004年シーズン。一野球記者にとっても、一生忘れられない年になるだろう。